

# アブ・トマス・ルガ菌による土づくりの提案

(施設園芸果菜類標準的作物)

目的	肥料名称	一般堆肥利用 (源肥無)	一般堆肥+源肥	源肥利用 (一般堆肥無)	備考
肥沃な土づくり	一般堆肥 (中熟以上の物)	2~4t	1~3t	—	注意点：土壌改良期間が2ヶ月以上確保できる場合には中熟程度の堆肥投入で土中でじっくり改良すると効果的だが、期間が取れない場合には、完熟物の利用を提案する。 完熟中熟問わず炭素率には注意する。
	米ぬか	300~400kg	200~300kg	100~150kg	
	スーパー源肥 15kg (35ℓ) (アブ・トマス・ルガ菌培養腐植化肥料)	—	10~15袋 (土中腐植促進)	30袋	
	ミネラルこんぶ 15kg (25ℓ) (完熟こんぶ粉体)	10~15袋			
	土づくりの元 (有機石灰) 20kg	5~10袋			必要に応じ増減する
	E・スケール (アブ・トマス・ルガ菌有機腐植液体肥料)	(基準量追肥含め 15~20 ℓ) 10~13ℓ	7~11ℓ	5~8ℓ	希釈倍率は問わず均等に撒ける水量に希釈し散布。
	源肥施肥時 E・スケール軽減可能量=源肥 75kg に対し E・スケール 1ℓ 基準量は、次作時は、20%ずつ減量可能 (但し最小でも 5ℓ)				
元肥投入後は、土中を乾燥させないように心がけてください。(土壌水分 50%程度) 可能ならば、乾燥防止にビニール被覆してください。(太陽熱処理併用はさらに効果的)					
施肥計画に際し	<ul style="list-style-type: none"> <li>上の施肥にて暖効的に窒素成分で 5~12kg 相当の作用効果が予想されます。</li> <li>作物によつての不足成分は、別途 (有機質肥料を推奨) に施して下さい。その際、土が肥沃になり成分効果が高まりますので現行の 2~5 割の減肥を心がけて下さい。</li> <li>堆肥と微生物により、長期的には、中・微量要素のバランスが整われていくが、即改善とはならないので、可能ならば土壌診断をし、改善対策を考慮してください。 ○注意すべき土壌状態 (代表的なもの) PH 値の酸性化・石灰等の投入 苦土の不足・苦土肥料投入 カリの不足・カリ肥料投入 リン酸過剰・リン酸肥料の減肥 塩基飽和度及び石灰、苦土、カリ飽和度</li> </ul>				
追肥について	<ul style="list-style-type: none"> <li>○栽培期間中の E・スケールの使用方法 基本使用量：1ヶ月 2ℓ/10a・当社取扱い資材「宝水」を同量混合し、希釈して灌水及び葉面散布。 (目的：土中の微生物バランスの整え、対菌予防効果、光合成促進など) 応用的利用・・・灌水にて 1ℓ/30~50 日間隔+15~30 日間隔葉面散布 (500~1000 倍液)</li> <li>○他の肥料 (液肥等) による追肥時の注意 作物及び栽培方法により追肥量は異なりますが、土中の養分効果が高まりますので、現行の 2~5 割の減量にて様子を見ながら施してください。 (施用時に E・スケールと混用すると、肥効が高まります。)</li> </ul>				
使用上注意	<ul style="list-style-type: none"> <li>堆肥の炭素率 (C/N 比) を 20 以下に組み立ててください。分解過程での一時的窒素飢餓の恐れ (定植時に、前作の残渣や籾殻やパークが目に見えて土中に残る場合は、要注意)</li> <li>農薬 (特に殺菌剤) との混用は、避けて下さい。使用の際は、7 日程度間隔をあける。</li> <li>薬剤等、石灰窒素による土壌消毒を行う場合には、十分なガス抜きを行った後、堆肥や肥料を施して下さい。</li> </ul>				
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>栽培途中からの使用は、3~5ℓずつで数回に分けて散布して下さい。 (急激な分解によるガスや熱による障害を防ぐ為で、特に未分解物の多い圃場は注意)</li> <li>期待できる効果は別紙 (パンフレット等) を参照して頂きたいが、基本的には、団粒構造形成し作物の根 (特に毛細根) を増大させる環境をつくり健全生育を促します。</li> <li>期待できる向上の代表的なものは、品質向上、収量増加、鮮度向上、減農薬、減 (化学) 肥料</li> </ul>				